

明治維新前後の駿府における工匠に関する研究

Study on the Craftsmen around the Meiji Restoration in Sunpu

新妻 淳子
文化・芸術研究センター

Junko NIITSUMA
Art and Culture Research Center

現在の静岡市街地は、江戸時代には駿河国の府中「駿府」であった。慶長12年（1607）徳川家康が隠居所として駿府城を築き、同時に整備された慶長の町割りが現在まで継承されている。駿府には徳川家ゆかりの寺社が所在し、久能山東照宮や静岡浅間神社のように装飾豊かな漆塗りの社殿群が現存している。これらは、江戸幕府によって修営が行われてきたもので、そこには駿府の工匠も関与していた。社殿の修営には大工、木挽、左官、屋根屋はもちろん、塗師、蒔絵師、絵師等、建築や工芸の工匠が多数携わった。江戸時代から継承される駿府の職人町や工匠たちの活動・居住状況について『明治前期静岡町割絵図集成』を分析したところ、建築系の工匠が多い本通り・新通り、工芸系の碁盤状町域、木材・流通系の町が浮かび上がり、それぞれの工匠にも着目して考察を行った。

Shizuoka city was called "Sunpu" (the provincial capital of Suruga) during the Edo Period. Shogun Ieyasu Tokugawa had built Sunpu Castle and designed town zoning at his retirement in 1607. There are many temples and shrines for Tokugawa family in Sunpu. Kunozan Toshogu Shrine and Shizuoka Sengen Jinja Shrine have richly carvings and Japanese lacquer works. Sunpu's craftsmen (for example carpenter, sawyer, plasterer, roofer, Japanese lacquer painter, gold lacquer master and painter) cooperated with the architectural engineers of the Tokugawa Shogunate. There were craftsmen residential districts in Sunpu. I analyzed "Archaic town map of Shizuoka in the early Meiji period", and recognized a set of the map on the distribution of three areas for the craftsmen. Architectural craftsmen lived in two main streets. Arts and crafts residential areas were laid out as a grid. Many lumber dealers and Sawyers were located in the northern part of Sunpu as shown on map of text figure.

1. はじめに

現在の静岡市街地は、江戸時代の駿河国府中「駿府」の町域を継承している。この町割りは、徳川家康が駿府を隠居所と定め、慶長12年（1607）の駿府城築城の際、同13～14年に整備されたもので、慶長の町割りと呼ばれている。駿府の町は、駿府城の東・北・西の三面に武家地を配し、町人地は町域の半分近くを占めた。駿府城の南側に広がる碁盤状の町域とその北西の短冊状の町々、南西に延びる旧東海道筋の町々が配置されている（図1）。

駿府には、駿府城をはじめ静岡浅間神社、宝台院、華陽院等、徳川家ゆかりの寺社が在り、家康が薨去後埋葬された久能山には久能山東照宮が造営された。その後、徳川頼宣と忠長を駿府城主に迎えるが、寛永9年（1632）以降幕末までは幕府直轄領となり、幕府の庇護を受けた。慶応4年（1868）徳川家達が駿府藩主に任じられ、明治2年（1869）「静岡藩」と改称、明治4年の廃藩置県により静岡県が成立すると静岡藩は廃藩となった。明治22年の市制・町村制施行により旧駿府町域は静岡市となる。

久能山東照宮や静岡浅間神社には装飾豊かな漆塗りの社殿群が現存し、これらは江戸幕府によって修営が行われ、駿府の工匠も関与していた。社殿の普請には大工、木挽、左官、屋根屋はもちろん、塗師、蒔絵師、絵師等、建築や工芸の工匠が多数携わった。

駿府には工匠が住まう職人町があり、その町名の多くは現在も継承されている。駿府の町の構成を伝える史料として、「駿河国駿府町方文書」中の天保13年（1842）町絵図¹が残る。明治前期の駿府の町々を描いた町絵図『明治前期静岡町割絵図集成』²（以下「静岡町絵図」と呼ぶ）もある。

中世から続く職人町「上大工町」には大工が、「大鋸町」には木挽が集住していた。慶長の町割りの際に「本通り」（東海道）と並行する「新通り」を新たに開いて東海道を移し、新通1丁目～7丁目、新通川越町の8町が配された。「新通2丁目」に上大工町の大工を分けて移住させ「新通大工町」「下大工町」とも呼ばれた。大鋸町の木挽を分けて移した「新通7丁目」は「新通大鋸町」とも呼んだ³。他に「材木町」「御器屋町」「桶屋町」「研屋町」「鍛冶町」「鋳物師町」等、建築や工芸に関わる町名が見られる（図1）。駿府の大工や左官に関しては拙稿⁴を参照されたい。

本稿では、明治前期（明治18～20年頃）の「静岡町絵図」を分析し、江戸時代から継承される職人町、工匠の活動や居住状況について明らかにするものである。これまで蓄積してきた建築系の工匠に加えて、社殿の装飾にも関わる工芸系の工匠にも着目して考察する。

2. 明治前期の「静岡町絵図」に見る工匠

「静岡町絵図」には、居住者の職業、番地、世帯主の氏名、家族の人数、同居者について記載され、明治維新後、次々と整えられた公共施設等についても確認できる。現在、静岡県庁や静岡市役所、静岡県警が所在する追手町には、県庁、陳列所、議事堂、有渡安倍郡役所⁵、静岡警察署、静岡治安裁判所、警察医局梅毒病院、静岡師範中学校等が記され、士族の居住状況や兼業の様子も判明する。

建築に関わる職業として大工、左官、石工、瓦、屋根屋、建具、表具、畳の他、建築を彩る鋳師や、塗師、道具や釘を打つ鍛冶、材木関係では木挽や板粉、材木屋等の職種が挙げられる。

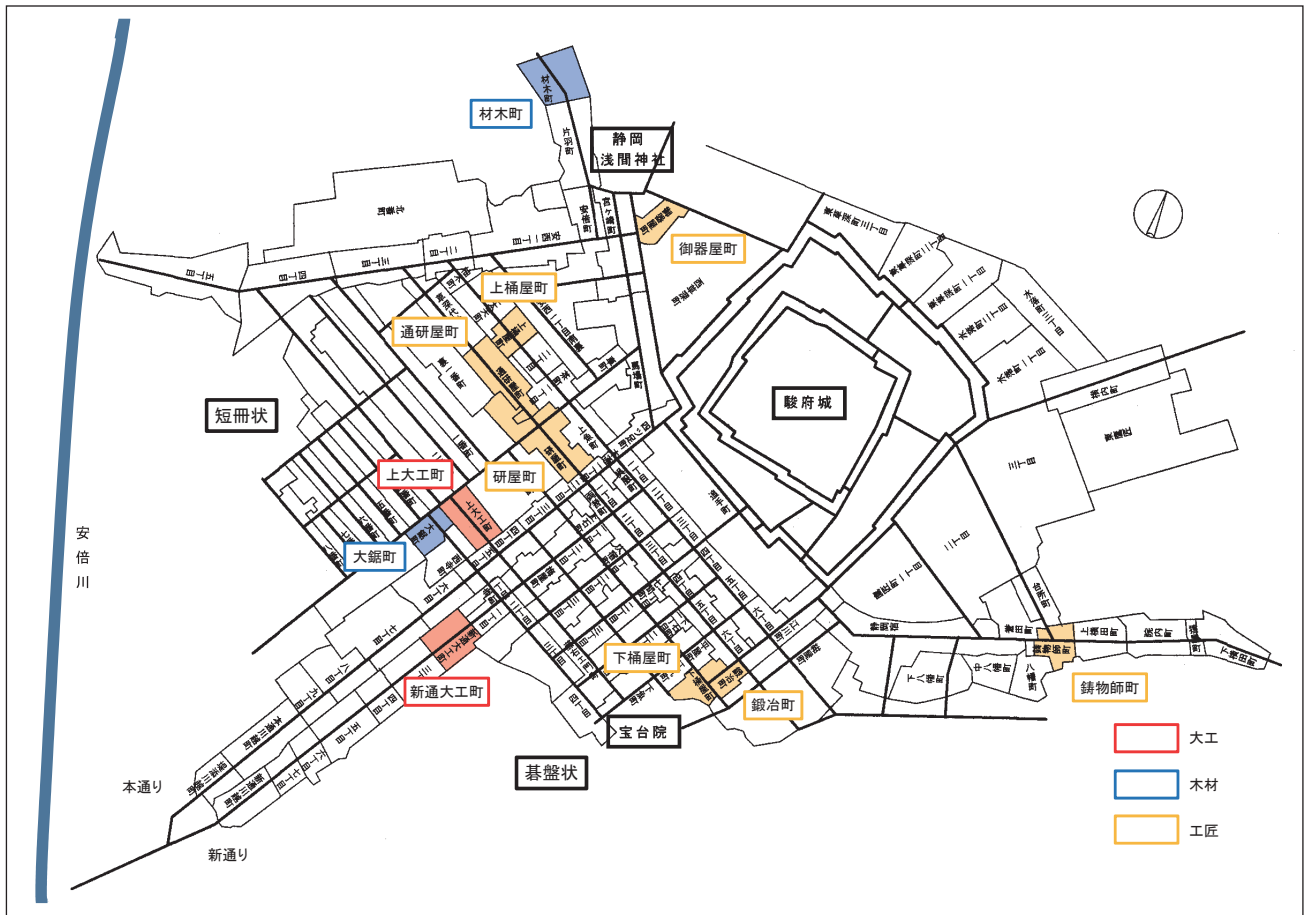


図1 駿府町名地図

※明治38年（1905）頃の地図から作成

工芸に関する仕事としては、主に漆器、蒔絵、塗師、指物、檜物、ロク口、下駄、傘、紙漉、竹細工、桶等が見られ、仏師、彫物師、ブリキ細工、寄木細工、鼈甲の職人も居住していた。

漆器、雛具、指物、竹細工、下駄等は現在も静岡の伝統工芸品として継承されている。

本研究では、「静岡町絵図」から町名、番地、職業、氏名を抽出してデータベースを作成し、以上のような建築・工芸関係の工匠の分布状況について分析を行った。各職5人以上の居住が認められる町について図2の明治前期「静岡」の工匠分布図にまとめた。凡例に示した10職種を地図に落とし込み、駿府全体の集住傾向を容易に把握できるよう、建築系の大工・左官は赤色、材木系の木挽・材木は青色、金物系の鍛冶・鋳は黄色、工芸系の塗師・指物・檜物は緑色、紙漉は黒色にて表示した。さらに、工匠の集住状況等、特色のある町については、その内訳を示した。

分布図から工匠の居住傾向を以下のように読み取ることができる。基盤状町域の工匠、本通り・新通りの工匠、静岡浅間神社門前の工匠、十分一材木蔵と工匠について考察する。

3. 基盤状町域の工匠

駿府城南側の基盤状に町割りされた町域には、塗師と指物師が多く分布していることがわかる（図2）。宝台院門前の町々には多くの塗師が居住し、計43人を数える（表1）。

表1 宝台院門前町の塗師

平屋町	江尻町	下魚町	寺町4	下石町2	下石町3	合計
10	6	5	6	8	8	43

さらに人宿町通りには塗師と指物師が混在している（表2）。

表2 人宿町通りの塗師・指物師

	人宿町1	人宿町2	人宿町3	合計
塗師	2	6	15	23
指物師	6	5	8	19

上石町通りには檜物師⁶などの職種も見られる他、上石町1丁目と2丁目の両町で10軒の鍛冶屋を数える（表3）。

表3 上石町通りの工匠

	上石町1	上石町2	梅屋町	合計
塗師		3	8	11
指物師	3	4	5	12
檜物師		5		5
鍛冶	4	6	1	11



図2 明治前期「静岡」の工匠分布図 ※明治38年（1905）頃の地図から作成

このように塗師や指物師が、駿府の町の中心部で多数活躍していたことがわかる。駿府における漆器の生産について『静岡木漆産業史』⁷によれば、駿河漆器も享保年間（1716～1735）江戸十組間屋⁸の組中に加えられ、榎の木地呂塗⁹諸器物が珍重されたことによって販路を拡張したという。これらは清水湊から江戸、大坂へ輸送され、明和年間に（1764～1771）大きな発展を遂げた。明和元年に呉服町5丁目に開業した土佐屋久七が、販路開拓の役割を担った。天保13年（1842）、土佐屋久七は長崎に向い、オランダ人への販売に成功、これが長崎貿易の始まりである。その際、長崎から漆器諸具の図面・標本を持ち帰り、駿府の優秀な工匠を集めて漆器の生産を開始した。平屋町と七間町の名工¹⁰が選ばれている。安政元年下田の開港に伴い欠乏所が設置されると、土佐屋久七も駿河漆器や寄木細工の販売に赴いた。安政6年（1859）の横浜港開港に伴い、下田港とともに欠乏所も閉鎖、駿府の漆器商は横浜港にて取引を開始した。寄木木地呂塗、青貝研出塗、梨子地塗立等が今度は横浜港から輸出された。後に静岡漆器共進会から土佐屋久七に贈られた特別賞の褒賞之証には「安政年間海外輸出ヲ企画シ陰ヲ冒シ雄ヲ辞セズ卒先シテ下田、長崎、横浜諸港ニ販売ヲ試ミ静岡貿易漆器の嚆矢者トナル其功勞誠ニ追懐スベシ」と、静岡貿易漆器を牽引した功績について記されている¹¹。慶応3年（1867）パリ万国博覧会に駿河漆器を出品、明治6年（1873）のウィーン万国博覧会には静岡の寄木細工が出品された。

駿府の寄木細工と蒔絵技術の発展について近世から明治前期に至るまでを以下に見てみたい。

3-1. 駿府の寄木細工¹²

寄木細工は、江戸時代に中国から長崎に伝来し、駿府にも伝わった。安政元年（1854）、土佐屋久七（3参照）によって桑材による極緻・精巧な市松寄木細工が始められた¹³。土佐屋久七は、下田の欠乏所で駿河漆器に加えて寄木細工を販売したが、極粗末なものであったという。

平屋町の指物師山本安兵衛（図3）が、寄木細工の第一人者といわれる。山本安兵衛は、平屋町で寄木細工を製作していた指安に弟子入りし、これまでにない緻密な寄木法を創案した。明治6年（1873）のウィーン万国博覧会に山本安兵衛は、寄木細工を出品すると、万国審査官より進歩賞牌を授与され、明治11年（1876）のパリ万国博覧会では銅牌を手に入れている。駿府からは茶町の漆卸佐藤吉左衛門、札之辻町の漆器卸商永倉右衛門もパリ万国博覧会に出品し、賞状を授与された。

静岡の寄木細工は盛んになり、それぞれ特徴のある作品が製作された。著名な工匠は次の通りである。

- 「指定」 増田清吉（両替町3丁目）山水花鳥模様等
- 「指大」 篠塚吉蔵（七間町1丁目2）方形細物の寄木
- 「指定」 木村定次郎（上石町2丁目）名倉形に木を接合

「指清」柴田清吉（本通9丁目）山本安兵衛弟子、模様物
「指茂」高木某（七間町2丁目）普通接合で大量製作
「奈順屋」高木新吉（人宿町3丁目）堅木を丸い柱に張付
曾根徳兵衛（新通5丁目）

※下線は「静岡町絵図」に記載

「静岡町絵図」に寄木細工職として現れるのは、上石町2丁目38番地の木村和平次（図4）と七間町2丁目33番地の八木初次郎で、他は指物職とある。上石町2丁目には指物職が3件あるが木村姓ではないため、木村和平次は「指定」の後継と考えられる。七間町2丁目の「指茂」は、「普通接合により多量に製作して、工人、徒弟数十人を使用し貿易の盃、壁板等を専業として、貿易品の過半数を製作していた。」¹⁴とあるから、大量生産をしていたようで、寄木細工職八木初次郎が継承したと推測される。

両替町3丁目の「指定」増田清吉は、緻密な山水花鳥模様の寄木を専門とする名工であった。同町17番地に指物職増田清七があるのは、名前の誤記か後継であると思われる。七間町1丁目2番地には指物職篠塚吉蔵が記されている。新通5丁目の曾根徳兵衛であるが、「静岡町絵図」によると同町13番地に指物職曾根田徳兵衛がある。「静岡町絵図」によると指物職は当時の駿府に235件あり、その中で寄木細工の名工と呼ばれる工匠は7名程度であった。

3-2. 駿府の蒔絵¹⁵

駿府の研出蒔絵の技術は、文政11年（1828）信州の画伯天嶺によって上石町1丁目の髹漆師¹⁶中川亀蔵の三男中川専蔵に伝授され、以降、駿府でも花鳥草木等の蒔絵が製作できるようになった。

専蔵の兄文蔵は天嶺に絵画を授けられ、後に画人中川梅縁として広く知られた。梅縁は文化元年（1804）から進められていた静岡浅間神社再建¹⁷において画方御用を命じられ、扁額、大歳御祖神社・麓山神社・八千戈神社の彫刻図案を手掛けた¹⁸。また、弘化5年（1848）人宿町3丁目の静岡浅間神社廿日会祭「脚物記録」の清画を梅縁が担当している。これは、当時同町の町頭勝太郎の父宮島宗蔵が下図を描き、それを基に梅縁が仕上げたものという¹⁹。宮島宗蔵²⁰は駿府の左官方棟梁で、文政13年（1830）から静岡浅間神社の再建掛りとなり、大歳御祖神社（天保2年上棟（1831））と八千戈神社（天保9年上棟）の造営に棟梁として参画し、その両社の絵師として梅縁も活躍していた。

天保元年（1830）には、江戸から来た小林留吉・遷次郎²¹によって描金の技術が伝えられ、その伝習生によって静岡蒔絵の四流派が成立した。明治初年（1868）には各流派の弟子も活躍している。

中川派 中川半助（上石町1丁目）
中川専之助（本通4丁目26-甲）蒔絵職
中川専蔵（本通8丁目1）蒔絵職
深幸派 深井幸太郎（呉服町5丁目）深江屋幸
藤伝派 藤伝（鍛冶町）
下山派 下山茂司（本通5丁目1）蒔絵師

※下線は「静岡町絵図」に記載

「静岡町絵図」にも蒔絵職が認められる。中川半助の後継であろうか、上石町1丁目3番地に蒔絵職中川周次郎とある。半助弟子²²の服部宗良は、「静岡町絵図」人宿町2丁目41番地に本県士族・蒔絵師と記されている。中川専之助は、本通4丁目の町の中程に居を構え（図6）徒弟養成に尽力したという。中川専蔵は天嶺から蒔絵の技術を伝授し、本通8丁目の自宅に江戸から来た小林留吉・遷次郎を迎える等、駿府における蒔絵技術発展上重要な人物である。下山茂司は本通5丁目にあり、山水画家として有名であった²³。

「静岡町絵図」には39名の蒔絵職を確認することができ、その中に本県士族で蒔絵職が5名²⁴含まれている。

3-3. 平屋町の工匠（図3）

宝台院門前の平屋町の町絵図から工匠の居住状況を示した。

通りの北側に塗師8人、南側に塗師2人と漆小売1人が見られる。指物師2人の内、山本安兵衛は駿府における寄木細工の第一人者で、平屋町では最も間口が広い。隣家は鍛冶職で銚職や金具職もある等、明治前期には寄木細工を核とした工芸の町であったと考えられる。

3-4. 上石町2丁目の工匠（図4）

上石町2丁目は通りの両側に工匠が多く居住している。鍛冶職が6人あるのは、当町と左官の町「車町」のみである。その他に檜物職5人、指物職3人に寄木細工職の木村和平次というように木工芸の色が濃く、これに加えて箆細工職が2人見られる。さらに、大工3人と木挽2人というように建築系の工匠も混在している。近隣の七間町2丁目には寄木細工職の八木初次郎もある。

4. 本通りと新通りの工匠

慶長以前の東海道「本通り」と慶長の町割りでも新しく東海道として開かれた「新通り」は、駿府城西隅から安倍川へ向けて並走している。新通りには上大工町の一部を分けて大工が移住した新通大工町（2丁目）、西寺町大鋸町の一部を移した新通大鋸町（7丁目）がある。

両大工町には天保期²⁵・明治前期共に大工の集住が見られた（表4）。

表4 両大工町の大工

	上大工町	新通大工町
天保13年（1842）	30	12
明治18年（1885）頃	16	10

天保期の上大工町の工匠の構成は、大工30人、指物職4人であった。明治前期の上大工町（図5）は、大工が約半数の16人に減り、指物職10人、塗師7人、蒔絵職1人、檜物職1人、鍛冶職2人、木挽1人というように建築と工芸の工匠がほぼ同数居住する工匠の町となっている。明治前期の「新通り」「本通り」の大工数は、新通大工町10人、新通5丁目7人、本通7丁目10人、本通川越町9人である。明治前期の木挽の分布については、大鋸町に6人、本通

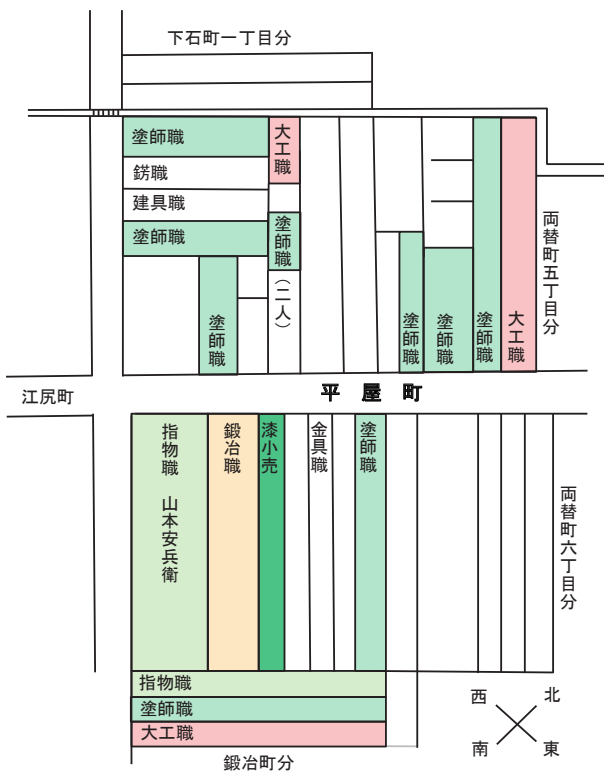


図3 明治前期「平屋町」町絵図

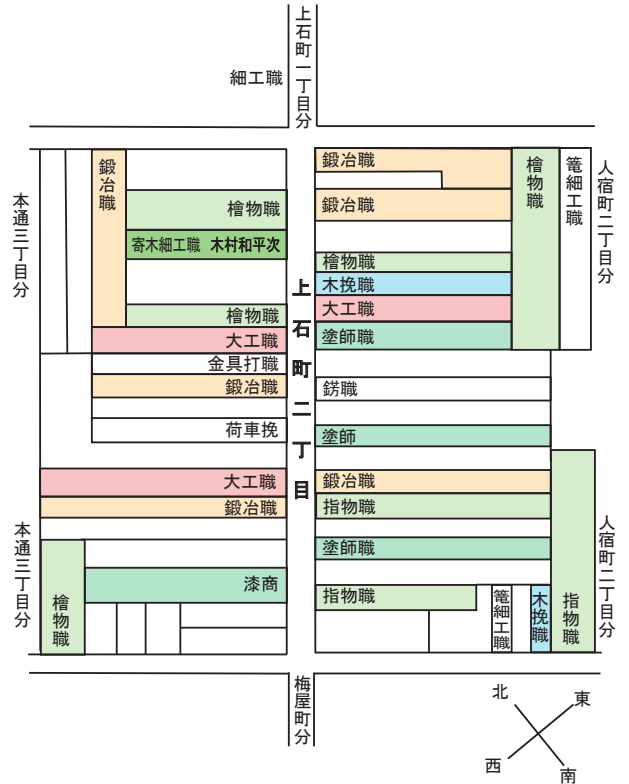


図4 明治前期「上石町2丁目」町絵図

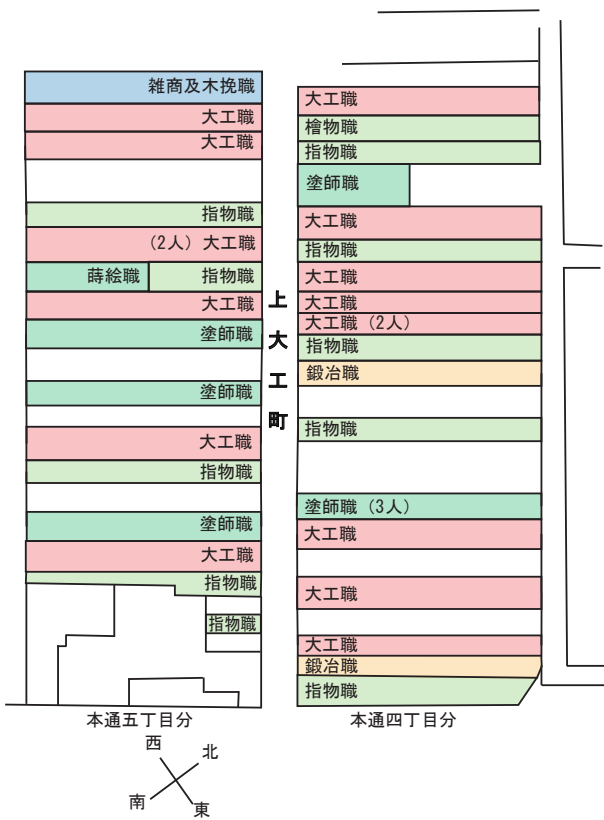


図5 明治前期「上大工町」町絵図

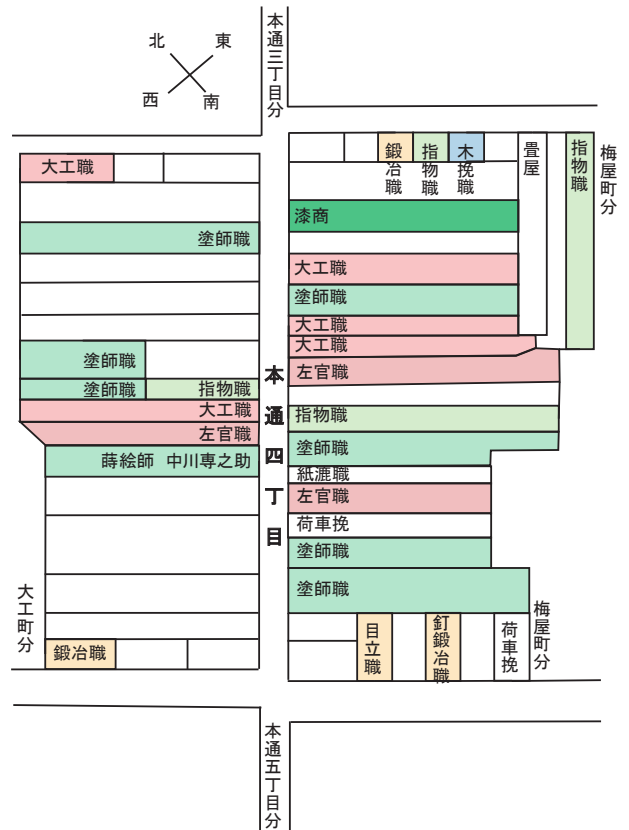


図6 明治前期「本通4丁目」町絵図

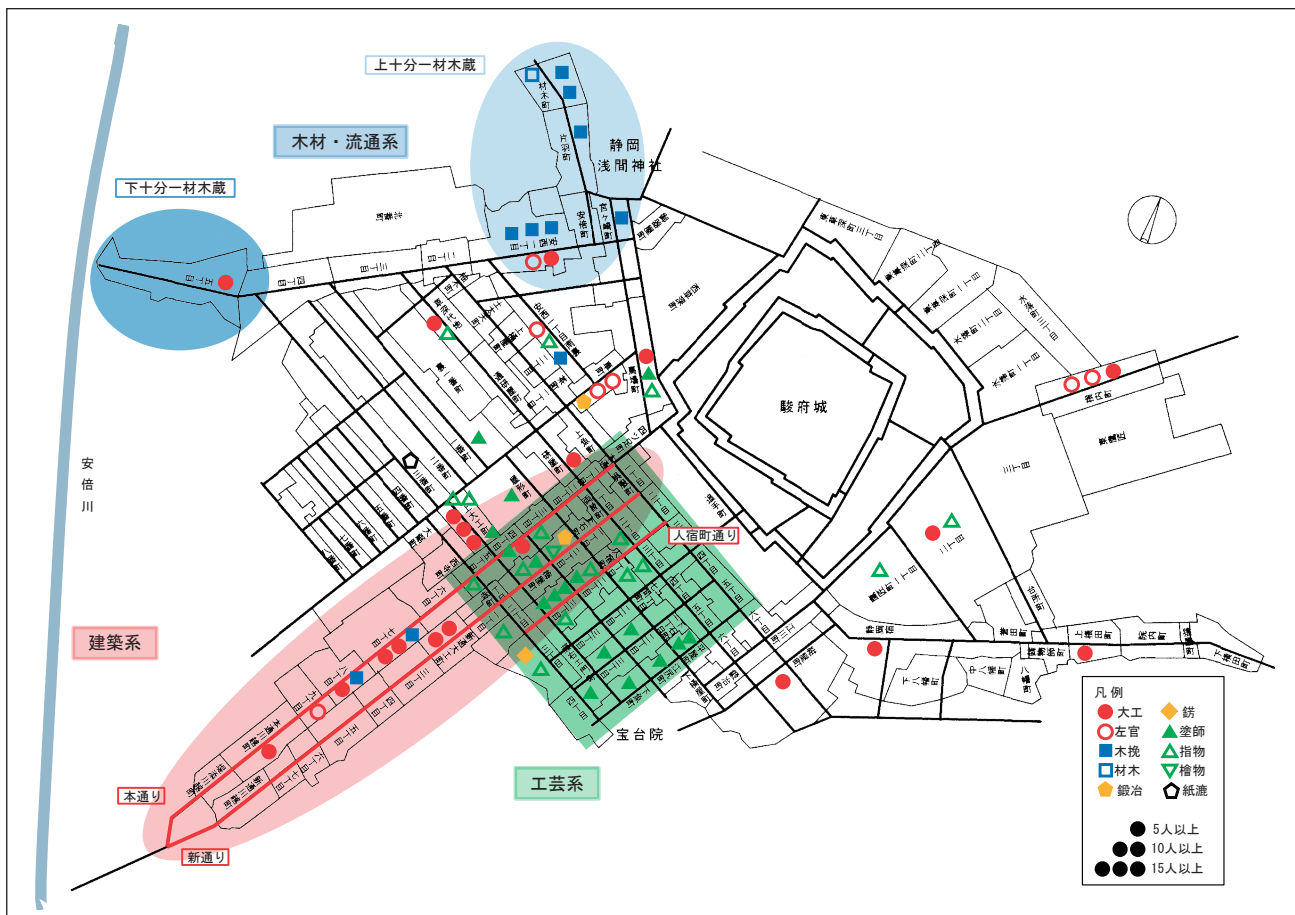


図8 明治前期「静岡」の工匠分布図 ※明治38年（1905）頃の地図から作成

材木町と安西1丁目には木挽が多数居住し、天保期³⁰と明治前期とほぼ同数である。製材した材木を扱う材木商も店を構えるが、近隣の3町に材木商は見られない。

中世から木挽が集住していた大鋸町には木挽が6人あり、材木小売商牧田太七は、通りを挟んで材木置場を所有している。駿府の他町にも材木商はあるが、「材木小売及木挽職」「材木商兼大工職」というように兼業する者も見られる。

6-2. 下十分一材木蔵の町（安西5丁目）

下十分一材木蔵が所在した安西5丁目には、木挽4人、材木小売2人と材木関係は少数である。一方、木材の筏流しに直接関わる筏乗3人³¹、木材や石材、筏の上荷（杉皮・木炭・茶・楮等の林産物）³²の陸運を担ってきた牛車業13人、さらに荷車挽17人、荷持7人等、流通に携わる人々が多く居住していたことが「静岡町絵図」から判明する。安西5丁目の木材・流通関係と工匠の分布状況を図7にまとめた。安西5丁目の西端は安倍川の堤まで至り、その先は河原である。牛車や荷車挽は、堤沿いから安西5丁目の通り全域に及んでいる。東隣の安西4丁目にも荷車挽2人と荷持6人が認められるが、陸揚げされた諸品は、河原近くで車等に載せられ駿府の町へと運び込まれたのだろう。

7. まとめ

「静岡町絵図」によって、今日まで受け継がれる建築や

工芸のものづくりの営みを垣間見ることができた。駿府から静岡へ移行した明治前期は、居住者の変動もあったが、基本的に駿府時代の生業は継承されていたといえよう。

明治前期の「静岡」における工匠の居住傾向を図8にまとめた。碁盤状町域は、多くの塗師、指物師、蒔絵師が居住する町々で構成され、工芸品を扱う店も軒を連ねていたことから「工芸系」の町であったといえる。

「本通り」「新通り」と周辺の町は、多くの大工、木挽、左官、鍛冶、指物師が見られる「建築系」の町筋である。

江戸時代から木材の流通を担ったのが、上十分一材木蔵が所在する材木町と下十分一材木蔵があった安西5丁目、そして周辺の町である。材木町と安西1丁目には多数の木挽と材木商が店を構える。一方の安西5丁目には、筏乗、牛車、荷車挽が集住し、木材・諸品の筏流しから陸送にも携わっていたことが伺える。駿府の町の北端には、このような「木材・流通系」の町が配されていた。

駿河漆器、駿河雑具、駿河指物等の静岡の伝統工芸品は、装飾豊かな漆塗りの社殿で構成される久能山東照宮や静岡浅間神社の造営に由来するといわれているが、駿河漆器が江戸、大坂へ本格的に進出したのが江戸中期（享保年間）、蒔絵技術が伝来したのが江戸後期（文政年間）、寄木細工を輸出用に製作を開始したのが江戸末期（安政年間）である。これらを踏まえて、静岡浅間神社社殿造営に携わった塗師・蒔絵師・鋳師、絵師等工芸系の工匠の活動実態や漆等の材料の調達について、さらに検証が必要である。江戸

時代から明治時代への技術の継承と海外貿易による工芸技術の発展も考慮したい。

人、もの、それらを包括する町の有機的な繋がりが変遷しつつも近世・近代・現代へと継承されてきた。その文化の諸相を今後広く解明していきたい。

本稿は、「明治前期「静岡」における工匠の活動」（日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）2018年9月）を基に加筆・修正し、図・表を加えて再構成したものである。

註

- 1 「駿河国駿府町方文書」町絵図、静岡県立中央図書館所蔵。天保13年(1842)の町絵図の他、一部の町に関しては元文3年(1738)、明治3年(1870)の町絵図も存在する。
- 2 明治前期静岡町割絵図集成 静岡郷土出版社、1989年。明治18~20年頃(1885~87)製作と推定される町絵図275点収録。
- 3 桑原藤泰「駿河記 上巻」臨川書店、1974年。
- 4 拙稿「駿府の工匠の活動について一駿河国における工匠の活動 その1」日本建築学会東海支部研究報告集第35号、1997年。拙稿「駿府の職人町と大工について一駿河国における工匠の活動 その8」日本建築学会東海支部研究報告集第41号、2003年。拙稿「駿府の職人町と左官について一駿河国における工匠の活動 その9」日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)、2004年。拙稿「左官組合と太子講一静岡市の事例から」(新宿区立新宿歴史博物館「鏝(KOTE)一伊豆長八と新宿の左官たち」新宿区教育委員会、1996年)
- 5 明治12年(1879)設置。
- 6 上桶屋町には「曲物職」が2軒在る。
- 7 『静岡木漆産業史』静岡木漆共同職業訓練所、1960年、p49~67。
- 8 元禄7年(1694)結成、天保12年(1841)廃止解散、嘉永5年(1852)駿府諸問屋の特許回復、明治維新で解散。
「江戸十組塗物問屋規定書写」(嘉永5年(1852))
一、御公儀様より享保年中仰せ渡され候、御法度の品、取扱候儀は勿論、猶又其後御触有之候、御停止の品一切御積込成さるまじく候事(後略)(『静岡木漆産業史』、p55)
- 9 栗、槻等の細工品に摺漆を何遍も施し、空目を止め、研上の上へ木漆で艶出したもの。(『静岡木漆産業史』 p48)
- 10 平屋町指万、七間町3丁目指亀(『静岡木漆産業史』 p53)
平屋町指磯、七間町1丁目指金・指兼(同上p54)
- 11 『静岡木漆産業史』 p67。明治26年(1893)4月2日静岡漆器共進会から東京市本石町2丁目小沢久次郎(孫)に贈られている。土佐屋小沢久七は、明治4年(1871)長崎で病死。呉服町5丁目の漆器店は、慶応2年(1866)の火災で、長崎から持ち帰った漆器諸具の図面・標本までも全焼。
- 12 『静岡木漆産業史』 p70~72。
- 13 『静岡木漆産業史』 p54。
- 14 『静岡木漆産業史』 p71。
- 15 『静岡木漆産業史』 p51~53、69。
- 16 漆塗りの職人。
- 17 静岡浅間神社は、神部神社・浅間神社、大歳御祖神社の総称である。神部神社は駿河国の惣社で「惣社」と呼ばれ、浅間神社は醍醐天皇の勅願によって富士山本宮浅間大社より勧請されたと伝えられ「新宮」とも称される。大歳御祖神社は安倍の市に在ったが、現在地に移され「奈吾屋社」と称された。境内社の麓山神社は「山宮」、八千戈神社は「摩利支天社」、少彦名神社は「神宮司社」または「神宮寺薬師社」と呼ばれた。静岡浅間神社は、鎌倉幕府、今川氏等に保護されたが、武田・徳川の攻防戦で臨濟寺とともに焼き払われ、徳川家康によって再建、寛永18年(1641)には家光による大造営が行われた。その後の安永2年(1773)と天明8年(1788)の火災によって全焼した。駿府城代と駿府町奉行の尽力によって、文化元年(1804)から慶応まで60余年かけて再建されたのが現社殿(重文26棟)である。(財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財神部神社・浅間神社・大歳御祖神社 第一期修理工事報告書』重要文化財静岡浅間神社修理委員会、1977。『重要文化財神部神社・浅間神社・大歳御祖神社 第二期修理工事報告書』1982年。『重要文化財神部神社・浅間神社・大歳御祖神社 第三期修理工事報告書』

- 1988年。宝鑑出版委員会「宝鑑 静岡浅間神社の文化財・社宝目録」浅間神社御鎮座千百年奉祝会、2001年)
- 18 中川梅縁画の「八千戈神社 二十四孝彫刻下絵」が静岡浅間神社に残っている(前掲『宝鑑』 p83)。また、大歳御祖神社本殿の小壁彫刻裏墨書に「天保六年(1835)／末十月 日／彫工立川内匠／御再建給方／彩色五郎右工門／門人 宮島勝太郎／五郎右工門方 萬蔵」、同本殿妻壁板裏墨書に「彫刻 立川内匠／御再建掛給方／彩色 梅圓茂房／門人 宮島正敬／梅圓方 龍山／梅圓方 楳二／周朝」とある(前掲『重要文化財神部神社・浅間神社・大歳御祖神社 第一期修理工事報告書』収録墨書写真より)。梅縁は雅号、初め文蔵と称し、通称は五郎右衛門(『静岡木漆産業史』 p51)。
- 19 増田亜矢乃「江戸時代の町方と廿日会祭」『静岡浅間神社の稚児舞と廿日会祭』静岡新聞社、2017年、p180~227。『静岡浅間神社廿日会祭の稚児舞』静岡市教育委員会、2017年。同書に収録の「廿日会御祭礼甲子福祭蹴物 坤」巻末に「右蹴物略図人数衣装其外共行烈帳巨細記之／絵師／中川梅縁 清画／宮島宗蔵 下図」とある。
- 20 拙稿「久能山東照宮の修営と工匠」『久能山誌』静岡市、2016年、p257~261。
- 21 小林留吉・遷次郎は、中川専蔵家に滞した後、江川町に居住し、江川町砂張屋の製品に描金。(『静岡木漆産業史』 p52)
- 22 明治以降の流派別蒔絵師(『静岡木漆産業史』 p69)
【中川派】中川半助一花井広太郎(後)河合友蔵(新通5丁目)一富井重吉・服部宗良(人宿町2丁目)
中川専之助・延次郎(四丁目派)一橋本文吉(本通4丁目)・中村清太郎(屋形町)・中水作太郎(葵町)
中川専蔵一杉山勇次郎(人宿町)・富田喜三郎(横内)・平山仙次郎
【深幸派】深江屋幸(深井幸太郎)一大田和貞治(下石町2丁目)・杉山徳次郎(下石町2丁目)
【藤伝派】(藤伝)一佐藤八右衛門・白井己之吉
【下山派】下山茂司一松村伴之助
- 23 『明治前期静岡町割絵図集成』「本通五丁目」解説。
- 24 人宿町2丁目41 本県土族 蒔絵職 服部宗良
裏一番町3 本県土族 蒔絵職 笹沼喜代次
六番町13 本県土族 蒔絵職 上木嘉一
屋形町33 本県土族 蒔絵職 井上徳保
馬場町甲137-1 本県土族 蒔絵職 大原孝一
(『静岡町絵図』データベースより)
「土族出の熊谷、笠間、上木という人達が有り」(『静岡木漆産業史』 p69)
- 25 「駿河国駿府町方文書」町絵図より。
- 26 「左官連名帳」明治8年(1875)、静岡市左官組合所蔵。
- 27 「仲間規定連印書」安政3年(1856)、静岡市左官組合所蔵。前掲「駿河志料一」。
- 28 阿部正信「駿國雑誌一」吉見書店、1976年。『静岡市史編纂史料 第6巻』静岡市役所教育社会課、1929年。『静岡市史 第2巻』静岡市役所、1931年。
- 29 海野実「安倍川とくらし」1979年、p61~92。
- 30 「駿河国駿府町方文書」町絵図より。
- 31 大正9年(1920)安倍川筏乗組合が設立され、当時の組合員数は174人、内静岡市居住者は13人であった(前掲「安倍川とくらし」 p79~90)。江戸~明治期も木材産地の筏乗りによって川下げされていた。
- 32 前掲「安倍川とくらし」 p77~78。筏は上流域の人々の交通手段でもあった。